

生徒中心の教育相談における発言の分析

— 自己の態度の変容を目指して —

小 林 仁 *

I はじめに

昨年、学校カウンセラー養成定期研修に20日間にわたって参加し、感じたことは、生徒に対して、忠告や助言を与えることがカウンセリングであると信じ込んでいた自分自身を反省すべきではないか、ということであった。それまでは、生徒が相談に来た場合、じっと耳を傾けてその話を聴きもせず、その悩みや訴えが何であるかを的確には握しようとしなかったようである。生徒から相談を受けたり、生徒を指導する際に、その言いたいことをよく聴いてやるというよりも、話の概略をつかむと、それについての自分の考えを述べ、性急に助言を与え、生徒の考えを変えようとし、それでよしとしていたようである。研修を受けて、今までそれでよしとして自己中心的態度に気づかなかったことを指摘されたようで、ショックであった。

それ以来、努めて指示的なものの言い方を避けるようにして来たつもりであるが、思うようにゆかず、とかく指導、助言的な言葉が出がちである。しかし、なるべく指示的な言い方を避けて、面接を重ねてゆけば、少しはよくなるのではないかと考え、はっきり決めたわけではないが、研修を受けていた昨年秋季ごろから、実践研究報告にはそれをテーマにしたいと思うようになり、その気持ちが変わらずに続くまま、正式に研究テーマとした次第である。

II 研究の目的

面接を重ね、技術をみがくことによって、スナイダーの言う指示的カウンセリングの範ちゅうの占める割合がどの程度小さくなり、それが生徒にどのような影響を与えるものであるかを研究する。

III 研究の方法

上述のような研究の目的から、なるべく指示的な発言が多くなりそうな生徒を選び、面接の回数を多くし、じっくり生徒の言葉に耳を傾ける態度を養い、それに応じて、生徒の側にどのような変化が現われるかを観察しようと計画した。しかし、適当な生徒がいるかどうかかわからず、短期間に何回も面接をすることにも疑問を感じ、計画を再検討した結果、5月、7月、9月の3回、面接を実施し、そのうち5月と9月の面接の逐語記録をとり、スナイダーのカウンセラー範ちゅうの定義に従って、その発言を分類し、その頻数と、百分率を調べ比較することにした。

研究の方法を考えているうちに、次のような問題点も出て来た。すなわち、面接時間を1時間として

その逐語記録をとり、更に分類するということになると、かなりの作業量になり、9月の面接を記録、分類すると、時間的にも間に合わなくなるかも知れない。面接の全部でなく、一部のみを記録、分類してみて、研究を進めてよいかどうか、という問題である。確かに作業量が多くなるという懸念はあったけれども、意図したような研究結果、つまり、面接を重ねることによって、指示的な範ちゅうがだんだん少なくなってゆくという結果がたとえ得られなかったとしても、逐語記録をとり、その分類をたくさんやってみることにより、そうした面での技術が、多少なりとも進歩すれば、それだけでも意味があり、又全部の記録、分類をやった方が、研究の信頼性を少しでも高めるのではないかと考え、困難を覚悟の上、面接全部について、逐語記録をとり、分類し、研究することにした。

IV 研究の過程と結果

当初の予定では、5月、7月、9月の3回、面接を実施することになっていたが、第1回の面接は、6月下旬になってようやく行われた。研究テーマから考えて、なるべく指導、助言を与える機会の多くなりそうな問題を抱えた生徒が望ましいのであるが、果たして希望どおりの生徒がいるかどうか、この研究を計画した時から懸念されていたのであるけれども、その懸念どおり、なかなか希望どおりの生徒が得られなかったばかりでなく、そういう条件を除いても得られず、困った。6月中旬になって、3年に進級した時に文科と理科のどちらを選んだらよいか、迷って相談に来た生徒があり、その生徒を研究対象にするつもりで話したところ、さいわい了解が得られた。

その生徒は、第2学年普通科の男子で、3年に進級した場合の類型(コース)選択をどうするか、文科系に進むつもりでいたが、理科系の成績がよくなり、むしろ理科系に進んだ方がよいと思うようになったけれども、まだどちらにしたらよいか迷っている。どうすればよいか、ということであった。

第1回の面接は、6月23日の放課後、3時30分から1時間行なった。文科、理科のどちらへ進むかということに迷っていることが訴えられ、いろいろ事情をたずねた結果、理科へ進みたいという本人の意志が強く、希望どおり、理科へ進むという結論が出たが、話を聴いているうちに、悩みは、文科、理科どちらへ進むかどうかということもそうであるが、いくら一生懸命に勉強しても、少しも力がつかないという点で悩んでいるらしいことに気づき、その点について話し合いを続けた。非常にまじめで、すなおな生徒で、毎日5～6時間勉強しているが、英語、数学、国語、理科、社会と、ほとんど全部の科目を勉強しているために、時間をかけた、深い勉強がなされていないことがわかった。そこで、英語、数学、国語の3科目くらいにしばって、集中的に勉強するように助言をした。

その後、授業中に、「どうだい。科目をしぼってやっているかね。」と声をかけたところ、気のせいだが、第1回の面接の時よりも明るい顔で、「はい。」と答えていた。

7月19日に保護者との懇談会有り、2年生の場合は、3年に進級する時のコース選択について、重点的に話し合った。その結果、8月10日に第2回の面接を実施した。11時30分から、30分くらい行なった。家庭の事情もあり、保護者は文科へ進めたい意向もあったようであるが、本人の気持は変わらず、理科へ進むということ、勉強方法については、英語、数学、国語にしばって勉強していることを確認した。第2回の面接は、逐語記録をとらないことにした。

9月14日の放課後、第3回の面接を行なった。その後の変化、特に勉強方法を変えて、3科目にしばって勉強した結果はどうか、聴きたいと思ったが、勉強方法を変えた結果は、まだ具体的に現われておらず、ただ迷わずに3科目を重点的に、明るい気持ちで勉強できるということであった。理科へ進むことにも迷いがなくなり、従って、あまり話をする必要もないということであった。第1回の面接と比較するためにも、1時間くらい面接して、いろいろ話をしてもらいたかったけれども、沈黙が多くなったり、問題には関係のない話が出たり、発言を促すような言い方や、質問が多くなったりするばかりなので、25分くらいで面接を終えてしまった。

第1回と第3回の面接におけるカウンセラー範ちゅうの頻数と百分率を示したのが表1である。その結果からみると、この研究のわらいである、指示的範ちゅうの減少が認められる。すなわち、第1回の指示的範ちゅうの占める割合が19.8%であったのに対して、第3回では7.8%に激減している。数字から見た限りでは、指導や助言を与えることがカウンセリングであると思い込んでいた態度も、少し変わったようである。前述のとおり、第3回の面接では、ほとんど話すこともない、と生徒が言うくらい、第1回の面接の折に迷っていたことが一応解決していたわけで、従って、指導や助言をすることもなかったのは当然と言えるかも知れない。しかし、当然とは思いつつも、指示的範ちゅうが少なくなったことはうれしいことであり、満足なことである。それが、仮に自己満足であるとしても、自分にも多少なりとも、非指示的な、生徒中心の面接が出来そうな気がして、うれしく思われるのである。たゞ、指示的な範ちゅうの中でも、「是認と激励」はあまり少くならない方がよいのではないかと思う。それは生徒に好意的に受けとられ、発言を促すように思われるからである。

その他、第1回と第3回の結果を比較して目につくことは、リードをとる範ちゅうが多くなっている点で、生徒に直接質問したり、発言を促すような言い方、態度が顕著に現われている。また、生徒の主要な問題には関係のない、社交的な会話が、第1回の面接では皆無であったのに、第3回の面接には顔を出している。いずれも、生徒に、あまり話することがないと言われたことが原因であろう。

第1回と第3回の結果を通じて、「簡単な受容」が多いのはよいけれども、非指示的なカウンセリングを目指すならば、もっと「感情の明瞭化」が多くなければならないと思う。4%足らずでは非常に少ないと思う。また、「行動の提示」、「否認と批評」等はずっと少くなければよいのではないかと思う。

一方、第1回の面接と第3回の面接に現われた生徒の側の変化について一言すれば、第1回目は、かなり緊張していたようであるし、いくら勉強しても成績があがらないあせりが感じられた。級友たちが、それほど勉強している様子もないのに、テストになるとよい成績をとる。それに反して、自分は精いっぱい努力しても、よい成績が得られないというあせりである。自信喪失といってもよいかも知れない。文科、理科のどちらへ進むかということもたいせつな問題であったが、それ以上に、成績の伸び悩みが大きな問題であったようで、面接においても元気がなかったようである。2回、3回と面接を重ねると表情が明るくなったようであり、第3回の面接で、カウンセリング関係が完全に終結した時、感想を求めたところ、何も迷うことがなくなり、落ち着いて勉強できるので、気持ちも晴々していると、生徒自身述べている。あせている様子も感じられなくなり、じっくり腰を落ち着けて、勉強に取り組んでいる様子が察しられた。

(表1) 第1回, 第3回の面接におけるカウンセラー範ちゅうの頻数と百分率

範 ち ゅ う *		第1回(6月)		第3回(9月)	
		頻 数	%	頻 数	%
リードをとるもの	XCS(場面構成)	0	0	5	4.9
	XFT(話題の選択と展開の強制)	1	0.3	0	0
	XDQ(直接的質問)	17	4.7	14	13.6
	XND(非指示的リード)	1	0.3	1	1.0
	リードをとるもの小計	19	5.3	20	19.4
非指示的	XSA(簡単な受容)	242	67.6	59	57.3
	XRC(内容または問題のくり返し)	4	1.1	3	2.9
	XCF(感情の明瞭化または承認)	14	3.9	4	3.9
	非指示的小計	260	72.6	66	64.1
半指示的	XIT(解釈)	5	1.4	1	1.0
指示的	XAE(是認と激励)	13	3.6	1	1.0
	XIX(情報提供)	12	3.4	2	1.9
	XCA(行動の提示)	34	9.5	3	2.9
	XPS(説得)	1	0.3	0	0
	XDC(否認および批評)	11	3.1	2	1.9
	指示的小計	71	19.8	8	7.8
周辺の	XEC(面接の終結)	0	0	0	0
	XES(関係の終結)	0	0	1	1.0
	XFD(社交的会話)	0	0	4	3.9
	XUN(分類できないもの)	3	0.8	3	2.9
	周辺的小計	3	0.8	8	7.8
総 計		358	100.0	103	100.0

* 詳細については「カウンセリングの基礎」(伊藤 博訳編 誠信書房)参照

次に、スナイダーとシーマンの研究におけるカウンセラー範ちゅうの頻数と百分率、及び研修中に、この面でご指導いただいた教育センターの白井所員のそれらと、カウンセリングの何であるかを、よくわきまえていない私の研究とを比較することは、大変おそれ多いことであるが、少なくなったとはいうものゝ、まだ指示的範ちゅうが、いかに多いかを示すために、参考までに四者の頻数と百分率を表にすると、表2 のようになる。(本研究の場合は、第1回と第3回とを合併したものである。)

表2 で気のつくことは、非指示的技術の範ちゅうが70.7%となっていて、かなり非指示的な技術が身についたように思われることであるが、「簡単な受容」、つまり、「はい。」「うん。」等が非常に多いため高率に達したばかりのことで、シーマン研究と本研究とを比較してみれば、「内容または問題のくり返し」、「感情の明瞭化または承認」がもっと多くあってよいのではないかと思われる。

指示的なものについては、前述のように、かなり少なくなったとはいふものの、四者を比較してみれば、まだ、いかに指示的な態度が改まっていないかがわかると思う。特に、生徒にある種の行動をとるように指示する発言、つまり、「行動の提示」の範ちゅうが8%もあり、「否認及び批評」、「情報提供」が各々2.8%、3%もあるのをみると、「道は遠い」という感じであり、一層努力しなければならないと思う。

(表2) 四者の研究におけるカウンセラー範ちゅうの頻数と百分率の比較

範ちゅう		スナイダー		シーマン		臼井		本研究	
		頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%
リードな ところもの	XCS	130	3.6	41	1.2	2	0.4	5	1.1
	XFT	23	0.7	6	0.2	0	0	1	0.2
	XDQ	207	5.7	14	0.4	5	1.0	31	6.7
	XND	82	2.2	29	0.8	1	0.2	2	0.4
	小計	442	12.2	90	2.6	8	1.6	39	8.5
非指示的	XSA	1,005	27.6	232	6.7	391	79.0	301	65.3
	XRC	122	3.4	525	15.2	26	5.3	7	1.5
	XCF	1,150	31.6	2,177	63.1	54	10.9	18	3.9
	小計	2,277	62.6	2,934	85.0	471	95.2	326	70.7
半指示的	XIT	294	8.1	40	1.2	0	0	6	1.3
指示的	XAE	172	4.7	1	0.05	0	0	14	3.0
	XIX	62	1.7	49	1.4	4	0.8	14	3.0
	XCA	7	0.2	1	0.05	0	0	37	8.0
	XPS	69	1.9	0	0	0	0	1	0.2
	XDC	33	0.9	7	0.2	1	0.2	13	2.8
	小計	343	9.4	58	1.7	5	1.0	79	17.1
周辺の	XEC	132	3.6	97	2.8	6	1.1	0	0
	XES	23	0.6	9	0.3	1	0.2	1	0.2
	XFD	41	1.2	34	1.0	4	0.9	4	0.9
	XUN	84	2.3	191	5.4	0	0	6	1.3
	小計	280	7.7	331	9.5	11	2.2	11	2.4
総計		3,636	100.0	3,453	100.0	495	100.0	461	100.0

V おわりに

自分自身の生徒に接する態度がどんなものであるかを知り、少しでも生徒の言葉に耳を傾け、性急に助言を与えるようなことを避ける態度が身につけば……と願って始めた研究であるが、一応の成果は納められたようである。しかし、まだその端緒をつかんだ程度ではないかとも思う。

進路の問題に悩み、力の伸び悩みに苦しむ生徒が、果たしてこの研究の対象としてふさわしかったかどうか、もっと多くの事例について研究すべきではなかったか、生徒の発言内容の分析もすればよかったのではないかなどの反省点も感じられる。第1回と第8回の面接記録や、昨年の研修の際に、面接場面研究の資料として実施したカウンセリングの記録などを、もっと丹念に分析し、例えば、面接の全過程をいくつかの段階に分けて、生徒に接する態度に何か変化がなかったかどうかを調べたりしたならば、研究も深まったのではないかと思うが、それをやるには研究のスタートが遅く、時間的に無理であったように思う。

逐語記録をとり、それを分類することは、なかなか大変な作業であったが、その作業を通じて、生徒に対する接し方、話し方で、いろいろ気のついたことがあり、思わぬ副産物が得られたような気がする。前述の内容と重複する点もあるけれども、気のついたことを次に列挙する。

- (1) 生徒のことばをそっくり返してやるのが少ない。
- (2) 生徒の感情がこもっていることばを聞き逃し、内容ばかりを追っている。

- (3) 簡単な受容、つまり、「はい。」、「うん。」、「そうですね。」、「なるほど。」等の発言が、極めて多い。
- (4) 直接的な質問が多い。
- (5) じっくり聴く態度にどうも欠けており、生徒の言うことをあまりよく聴いていない。質問に対して、必要以上に答える傾向がある。そして、生徒自身が考えていなかったことを、新たな疑問点として次々に提供している感じがする。
- (6) 生徒の感情を明瞭にしてやるような発言や、生徒の話の内容をまとめて、分かりやすい形にしてやるような発言が少ない。
- (7) 一般に話し方がくどい。

この研究を通じて、自分の面接態度、話し方等の問題点が明らかにされたような気がするけれども、非指示的な範ちゅうが更に高率を占め、指示的な範ちゅうが漸減するように、自分の技術をみがいていきたいものと思う。今までの指示的態度が根深く身につけているので、なかなか困難なことと思うけれども、努力していきたい。

参考文献

- 伊藤 博訳編 カウンセリングの基礎 誠信書房 (1960)
- 新潟県立教育研究所 昭和39年度中学校カウンセラー長期研修第1期研修報告書